ホトトギス

八月号

ホトトギス
昭和二十四年三月二十六日運輸省特別授与認定雑誌第六二七号
平成三十年八月一日発行（第百二十一巻第八号）

風雅の小筥〔八〕

廣　太　郎

平成二十一年三月七日から四月十九日まで、横浜にある県立神奈川近代文学館に於いて、虚子没後五十年を記念して「子規から虚へ―近代俳句の夜明け―」と題された企画展が行われたのを御記憶の方も多いだろう。芦屋の公益財団法人虚子記念文学館所蔵の虚子の遺墨簿を多く展示して、多くの方に御来館頂いた。展示だけではなく、色々なイベントも行われたが、その中で、不肖私もパネラーの一人として参加させて頂いた「虚子の客観写生」という内容のシンポジウムが行われた。虚子は生前客観と言ったり、主観の大切さを反対に説いたりして、何か取り付く島の無い一面もあるのではないか等と色々な意見が交わされたが、結局これといった結論は出なかった。勿論この問題は奥が深く、一朝一夕に答が出る事がないのは当然であるが、私もこの時以来、客観写生については、自身の勉強不足も相俟って暫く考えを棚上げしてきたが、ある日ある会で、公益社団法人日本伝統俳句協会副会長である大輪靖宏先生が講演をされ、虚子著『俳句への道』の一節を引用された。

私は敢て客観写生ということを言う。それは、俳句は客観に重きをおかねばならぬからである。（中略）その客観写生ということに努めて居ると、その客観描写を透して主観が浸透して出て来る。作者の主観は隠そうとしても隠すことが出来ないのであって客観写生の技倆が進むにつれて主観が頭を擡げて来る。

この文で目から鱗であった。皆様はどうお感じになられるだろうか。

PDF= 俳誌の salon

句日記　汀子

平成二十九年八月六日　下萌句会

星月夜三瓶の旅も終りけり
近づいてゐる台風と知つてをり
水音の涼しさに居て祈りあり
冷房に居ること忘れゆきにけり
忘れてはならぬ墓参と思ひつつ

八月七日　ロイヤル俳壇

忘れ得ぬものの一つに阿波踊
立秋と思へぬ荒き一日かな
颱風の予報に油断なかりけり
新涼にとどこほりなきスケジュール

八月八日　大阪倶楽部

朝顔に昨日と今日と明日のあり
蜩につづる山荘物語
神戸港開港記念大花火
待つ人出闇を抱きて揚花火
新涼の旅の昨日のはや遠し
早寝せしこと悔まるる花火の夜
新涼の風にゆだねし稿債も

八月八日　綿業倶楽部

新涼の往復切符ポケットに
今日も又心の中の墓参かな
新涼の旅疲れとはなかりけり

八月十日　清交社

山荘の滞在長し法師蟬
新涼と思へば耐へて行くことも
残暑なき二十四階へと着きぬ
気にかかる消息聞きぬ法師蟬
稿一つ仕上げ涼しき家居かな
誰彼の恙の話聞く残暑

八月十五日　有恒俳句会

新涼をもたらせし雨ならばとて
雨止みしこと秋の蟬告げてをり
咲きしこと木槿の一日はじまりぬ
進みゆく季節新涼身ほとりに
雨止みて新涼の朝はじまりぬ

八月十五日　無名会

一と雨に秋めく朝となつてをり
朝の雨止み新涼の客を待つ
雨止めば秋めく心消えはじむ
これまでの墓参三十三回忌

八月十六日　夏潮句会

流星に今宵の夜空明け渡す
酔芙蓉とて朝の間の過ぎ易く
米国へ旅立つ友に秋涼し
新涼の雨止みしより集ふ会
白粉の花の蕾の活けられし
流星を見し夜の旅を語らばや

八月十九日　東北ホトトギス俳句大会前日句会

虚子句碑を訪ふみちのくの秋涼し
みちのくの秋の蟬より旅路あり
宿失せて句碑の所在を訪ふも秋

八月二十日　東北ホトトギス俳句大会

爽やかに名前と顔と一致して
待つといふことも爽やかなる旅路
この道は奥の細道露けしや

八月二十四日　アネモネ句会

みちのくへ秋めく心置いて来し
阿波の旅思ひ出したる盆の月
秋めくや余裕の心生れつつ
秋めくといふ日待たるる旅心
雨もまた秋めく心いざなへる
病む友に秋めく日々を祈りつつ

八月二十五日　時雨句会

流星の引寄せてゐし夜空かな
身ほとりにありて秋扇なりしかな
山深く来て蜩と夕風と
蜩に山荘閉ぢる日も近し
雲退かぬ流星の夜となりにけり
湿布張り終へて使へる秋扇

八月二十六日　ホトトギス社吟行会

秋扇をさめて一歩会場に
静雲の縁の寺を訪ふも秋
稿債を抱へ来しこと秋暑し

PDF= 俳誌の salon

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十九年八月三日　蕉心会

下町に響くエンジン音晩夏
涼風に鴎の声の裏返る
直線に曲線に水尾秋近し
タクシーは船にもありて水尾涼し
鳩飛んで魚跳んで海猫昼寝かな
今年竹親の背中を見て育つ
咲くものを秘め記念館茂りたる
夏館壁と太陽閲ぎ合ひ

八月四日　カトリック新聞選者吟

籐椅子に座してロザリオ繰る漢

八月五日　鬼貫顕彰俳句大会

熊蟬を聞けば故郷近付ける

八月六日　野分会菩屋例会

草市の立てば喪心里心
木槿垣端より目覚めゆく寺苑
盆の市立つや五山に見守られ
底紅を塗り替へてゆく羽音かな

八月六日　青嵐会菩屋例会

つまべにに君の心を染め上げて
踊見の背ナが疼いてをりにけり

八月七日　朝日カルチャー若草句会

初秋や水は明日へ流れゆく
大阪の三十八度てふ残暑
新涼の風は昨日を遠ざけて
鳴くものの声を吸ひ込む残暑かな
夜は星に命預けて花木槿

八月九日　「俳句α」創刊二十五周年記念出句

句碑の文字弾いてゆける蟬時雨
大屋根の涼しき反りでありにけり
秋近き風は下町より生るる
その中に命鎮めて草茂る
滴りを集め大川嵩となる
指先に魂を宿せし踊かな
踊より戻りし君の濡れてゐる
この残暑嵐近付く気配とも
明日の無き木槿は今日を使ひ切り
秋の蟬一オクターブ高く鳴く

八月十日　土筆会

文月の日差三十七度かな
文月や文字に囲まれたる生活
昨日とは違ふ新涼纏ふ園

八月十四日　北國文芸選者吟

昨日もう思ひ出となり秋涼し

八月十七日　登高会

涙雨八月十五日の首都
不知火やレイテソロモンミッドウェー
懸煙草ショートピースに嵌りし日

八月十九、二十日　東北ホトトギス同人会、大会

稲の花指呼に新幹線北へ
秋の蟬みちのくの風謳歌して
虚子の文字解読もして秋涼し
階段の一段毎に秋涼し
五大堂新涼といふ詩心
奥の院より新涼の風立ちぬ
みちのくへ鉄路一本稲の花
星飛ぶやホルスト未発見スコア
流れ星夜汽車はアンタレス通過
三時間命燃やして稲の花
東京の果てに住み古り大根蒔く

八月二十三日　目黒学園句会

初嵐都心縮めてゆきにけり
一日に百句を詠むと生身魂
五十六と酌み交はせしと生身魂
草原の命醒まして初嵐

八月二十六日　ホトトギス社吟行会

法師蟬静雲句碑を震はせて
秋祭町が躍つてをりにけり
交差点てふ秋風の拠り所
湘南の気風に触れて秋暑し
新涼や静雲句碑に出会ふより

八月二十七日　野分会東京例会

草市の立ちて小路といふ雅
子の未来先祖の過去や草の市
日を畳み風を畳みて木槿落つ

八月二十七日　青嵐会東京例会

その中のつくつくぼふしてふ指揮者
秋空を仕上げてゆきしタワーの秀
草の丈使ひ切つたる赤蜻蛉
終の声放ちて秋の蟬落つる
フェラーリのエンジン音も秋めける

八月二十一日　夢二忌全国俳句大会前日句会

明日の忌を仕上げる霧として深し
霧包む逮夜の宿の静寂かな

八月二十二日　若水句会

PDF= 俳誌の salon

雑詠

廣太郎　選

梅林の日輪として高くあり　熊本　岩岡中正

遠野火の人を孤独にしてしまふ
地に跪きては野火を放ちけり　神戸　千原叡子

詳細の知れぬ訃音や涅槃西風
篆刻に遺る君が意冴返る　龍ケ崎　今橋眞理子

白梅や書斎にちらと師の起居
鳥帰り人は水辺に戻りくる　東京　田丸千種

みどり児を迎へて一家春めける
みどり児の寝顔泣き顔あたたかし　神戸　後藤比奈夫

道徳の授業中なり蠅生る
蠅生れ少し濃くなる町の陰　同　和田華凜

春星や目抜き通りの乏しき灯
金色の御座船濠に梅の城

天守閣ついて廻れる梅探る
しらうめや白にも濃しといへる白

月遠くおきて修二会の奈良の闇
青よりも赤の哀しき涅槃像

浮世絵のくれなゐはこれ桃の花
大奥の跡のものの芽芳しき　東京　大久保白村

足踏みしバレンタインの日のダンス
この帰路はロマンスカーで春の夜へ　神戸　涌羅由美

朝桜時の止まつてゐるやうな
のどけしやチョークの線路どこまでも　松本　唐澤春城

あをぞらに描く曲線山笑ふ
不自由に挑むリハビリ春の風　神戸　山田佳乃

リハビリに東風の運んできし吉報
二刀流翔平応援春爛漫　同　立村霜衣

初雷のひとつ木霊を引き連れて
城壁の闇へと戻る寒鴉　香川　湯川雅

不折の画ほのぼのとあり鳴雪忌
風起しつつ壇上へ卒業子　長岡　安原葉

春愁が酒を薄めてをりにけり
若蘆の明るさ鵺塚の暗さ　東京　橋本くに彦

のどかさも亦独り占めしたきもの
春光や無窮の空を溢れ出し

太陽に向けし炎や牡丹の芽
もてなしか茅葺き屋根を守る炉火か

山笑ふ県境またぐ橋の上
野良猫と睨めつこして山笑ふ

花へ花影置く花の息づかひ
乾杯はみな紙コップ花筵

高笑ふ一座小さな花筵

PDF= 俳誌の salon

雑詠句評（七月号より）

蔵の戸の古き音たて雛運ぶ　福知山　**吉田節子**

古く重い音をたてて蔵の戸を開けてその中から雛を取出して飾ったという一句である。土蔵の重厚なぎいと鳴る扉の音が聞える様だ。無理のない自然な表現力は素晴らしいと感じる一句である。（保佳）

古くからある蔵を想像するが、そこに仕舞われている雛も年代の古いものなのであろう。毎年三月三日を迎える毎に仕舞われている雛を出して飾る、そのプロセスに由緒を感じる。大切に仕舞われ、大切に出され、大切に飾られている雛の歳月が何とも煌びやかに伝わってくる。（廣太郎）

祖父米寿息子定年孫卒業　東京　**大久保白村**

もちろん「卒業」だから春。三世代それぞれ人生の区切りが描かれ、それぞれに祝意のこもった、明るくあたたかな、春の一句。それぞれの世代がそれぞれ無事息災に年を重ねることこそ一番の幸福であるという、誰もが納得できるひとつの哲学が、わかりやすく淡々と述べられている。禅語にいう「日々是好日」なのだが、「祖父米寿」「息子定年」「孫卒業」と漢字だけで簡潔に述べられたところにも、飾らない幸福が表現されていて、共感がもてる。（中正）

祖父が米寿ということは八十八歳、父の定年は六十歳か、最近は六十五歳であろうか。そうなると、息子の卒業は年齢から想像すると大学だろうか。そんな事を考えたり出来る楽しみがこの句から出来るだろう。季題の使い方が絶妙で、新鮮な視点も見て取る事が出来る。（廣太郎）

PDF= 俳誌の salon

天地有情

六子選

春を待つ老の心を老いて知る　神戸　後藤比奈夫
口中の燃えたる愛のチョコレート　同
鷹の空地球を包み込んでをり　東京　稲畑廣太郎
名苑の余白を埋めて小六月　同
北国に遠き便りの梅二月　長岡　安原葉
晴つづく北国てふもまだ二月　同
君病みて一年が経つ春寒し　相模原　木村享史
綺麗好きなりし遺影に春の塵　同
初桜明日は月命日なりし　神戸　和田華凜
若葉風里に三つ子の生れたる　同
大門をくぐれば花の夕心　龍ケ崎　今橋眞理子
髪に触れ夜の桜を仰ぎみる　同
雨上るより初桜初桜　神戸　三村純也
花ミモザ神戸に似合ふ雨として　同
人悼みをれば音立て芹の水　熊本　岩岡中正
書きかけの原稿おきて梅見人　同
過ぎし日は鯡御殿と呼ばれたる　東京　今井千鶴子
花は葉となりし吉野よ遥かなり　同

米寿祝ぐカードパリより春隣　神戸　千原叡子
高虚子の新作能や実朝忌　同
追悼の旅の終りぬ花の雨　東京　山田閨子
み吉野の春を深める雨ならん　同
近づきし火星へとべる蛍かな　福山　竹下陶子
一天を仰げと桐の花咲ける　同
忘れたきことのあれこれ土筆摘む　仙台　赤川誓城
妻逝きし淋しさに耐へ土筆摘む　同
灯を消してなほ水仙はそこにあり　吹田　大橋晄
風花や遊ぶがごとく風に舞ひ　同
駅までの道バスの路花の径　東京　高濱朋子
啼き交はす声に目覚めて朝桜　同
花の径来て花の道花の路　宝塚　水田むつみ
花は散り消えざる想ひ深く抱き　同
散ることもまづ白梅にはじまりし　熱海　嶋田一歩
紅梅に散りゆく速さあるといふ　同
嬬恋にひとり虚子忌を修しをり　群馬　中杉隆世
花の日の移ろひ易く移ろひつ　同

PDF= 俳誌の salon